

大穴牟遲神の根国訪問譚をめぐって

福 島 秋 穂

私たちが、「神話」の名をもつて呼ぶところの古代の物語は、未開或は古代と称される時代に生きた人々の脳中より産み出されたものであり、其れが私たちの眼に如何に荒唐無稽なものと映つても、其れを創作し、次代へと伝達した人々にとっては、嚴然たる真実を語るものと考えられていたのである。また、神話は超自然的存在態(神)を主人公とする物語ではあつても、所詮は人の思考により創られたものであり、其れには其の創作者たる未開・古代人の現実の生活・体験或は思想が如実に反映されていると考へて良い。

我國の古文獻である『古事記』、『日本書紀』に、首尾一貫した物語として載録されている「神話」は、其の物語自体が内包する矛盾の解明、或は両書の記事の比較検討によつて既に明らかかなよりに、例えば「風土記」の記す其れに見られる如く、本来其の構成各部分が、個々別々断片的に、創作・伝承されていたものである。それぞれ発生の時と場所とを異にする神話が、其れらを載録することになる書物の編纂目的に叶うよう、編輯者により意圖的

改竄の手を加えられ、首尾一貫した物語を構築するよう綴り合わされて成つたもの、其れが、前記二書の記す「神話」であり、其れは最早純然たる意味での神話の名には値しないものである。ただ、上掲二書の記す「神話」が、本来民間に其の出自を有する断片的神話を利用して成つたものであり、両書編輯者独りの完全創作ではないため、私たちは、此の「神話」を注意深く眺めることにより、其の原神話を創作した人々の抱いた思想の何たるかを窺知し得るのである。

此の度は、上記のような考えに基づいて、『古事記』に記された大國主神に関する物語のうち、所謂「稲羽の素菟譚」に就いて展開される、八十神の大穴牟遲神に対する迫害の物語と、大穴牟遲神による根国訪問譚とを考察の対象に選び、其処に見られる幾つかの問題点に眼を向け、未開・古代人の思想が如何なるものであつたかを搜つてみることにする。

* * *
大穴牟遲神が、八十神の共同謀議により、二度までも殺害され、

其の都度「御祖命」の尽力で蘇生して、「木国の大屋毘古神」のもとから、「須佐能命の坐す根堅州国」へと流浪し、其処で幾多の試練を受け、遂にスサノヲ神の娘スセリビメを獲得するという物語は、ほぼ其の編纂・成立の時期を同じくしたと言われる『古事記』と『日本書紀』の二書のうち、前者にのみ見られ、後者には採られていない。

此の両書における当該物語載録の有無は、其のこと自体が大きな問題であると同時に、物語の意義が那辺にあるかを窺知することに一層の困難を感じてきたのである。即ち、私たちは、「古事記」・『日本書紀』の孰れか一方に記された一つの「神話」を祖上に載せて種々考察をする多くの場合、他方に載録された其れの異伝をまず参照し、比較検討することで、其の「神話」の意義なり、其処に見られる疑点なりを解明せんとするのであるが、此処に考察の対象とした一連の物語の場合、其の便法を採用することは不可能である。其れ故に、当該物語の意義を如何なるものと見るかについては、此れまでに、其の前半部即ち八十神が大穴牟遲神に対し種種の迫害を加える点を重視して、「上古に於て断えず行はれた、異民族若しくは他の氏族との闘争を物語るものである」とする説や、後半部の大穴牟遲神による根国訪問譚の語るところに拠つて、一個の「求婚説話」であると解する説、「婚姻儀式の反映」とする説、前・後半部を通して、「若者に対する訓練の土俗」の反映であると見る説などがありはしたものの、「その本原的意義に於ては、成年式儀礼の物語である」とする見方にほぼ落ち着いた感のある今日、猶其の細部の検討に至っては、全くと言って良い程になさ

れていない状態にあるのである。

今、其の未解決状態にある事柄の一・二を考察の祖上に載せて、其の真の意義と其れに関わるころの未開・古代人の思想を明らかにしてみることしよう。

* * *

焼けた大石を用いて殺された大穴牟遲神が蘇生することになる条を、『古事記』は、「其御祖命、哭患而、参_二上天_一、請_二神産巢日之命時、乃遣_二甕貝比売與_二蛤貝比売、令_二作活_一。兩甕貝比売岐佐宜集而、蛤貝比売待承而、塗_二母乳汁_一者、成_二麗壯夫_一而_二出遊行_一」と記している。此の甕貝比売と蛤貝比売の活躍については、『古事記』諸本の記す「甕」の字が字書に見られぬものであるところから、宣長が、「蚶を甚と作るを誤れるものなり」とした意見にま₆ず従い、此れに、『倭名類聚鈔』の「蚶 唐韻云蚶子綴反舟色立成云和名木佐蚌属状如蛤而厚外有理縱横即今蚶也」₇、或は、「蚌蛤 兼名苑云蚌蛤放甲二音蚌或作一名含漿、『大和本草』の「蚶 アカギヒ也」₈とい₉う記事などを合わせて、甕貝即赤貝、蛤貝即蛤とした上で、「貝殻の粉を貝の水で練つて火傷に塗るといふやうな簡易な治療法」₁₀、「火傷に対する民間療法の一」₁₁などと、諸家一様に、未開・古代人が、貝を火傷に対する薬品として用いたことによると説明している。甕貝・蛤貝共に物語中で人神格化されているが、前にも述べたように、神話が、其の創作者の現実の生活・体験或は思想を反映しているものであることを思えば、恐らく、此れらの説が述べていることは、正鵠を得ていると考えられる。しかし、それでは何故、未開・古代人の間に、赤貝や蛤の如き貝を、火傷の特効

業と見る考えが出来したかについては、寡聞の及ぶ限りにおいて、誰も此れを明らかにしようとはしてはいないのである。

一体如何なる理由があつて、我國の未開・古代人は、赤貝や蛤を火傷に有効な物と認めたのであろうか。

私は、イザナキ神の黄泉国訪問譚において降魔力を發揮した桃の実の場合と同じように、未開・古代人によって、赤貝・蛤の形体が、女性生殖器の外形と似ていると考えられたことに、恐らくは、其の力能の認められる端緒があつたものと考へている。

女性の生殖器が生命力の源泉であることは、出産という現象を通して、未開・古代人の眼にも歴然たるものがあり、此の生命誕生の場・生命力の象徴が、生とは対立関係にある死と、其れに繋がる諸々の傷病及び其れを齎すと考へられた魔的な存在態に効力を有するとされたことは、天石屋戸（天石窟戸）の前における、或はまた猿田彦神を前にしての、アメノウズメの行爲をあげるまでもなく、未開・古代人の思考様式に照らして充分に考へられることである。「総じて九州にてはヤケドの応急手当は其局部を女の或処へ入れるに限ると言て居る。船頭其他の下級社会の者大ヤケドした時などは平氣でかういふ事も実行するさうである。」¹²⁾ というのは、現代における民間習俗の報告であるが、此のようなことは、文明の恩恵に浴することのなかつた未開・古代社会にあつては、極めて普遍的な事柄であつたと思われ。

一方、赤貝や蛤等の貝類を、其の外形上の類似から、女性生殖器の比喩として用いることは、『土佐日記』に、「なにのあしかげ^(老無見)（交）（蛤貝類）^(鮎)」^(兼)と記述することづけて、^(兼)はやのつまのいすし、すしあはびをぞ、こゝろに

もあらぬはぎにあげてみせける^(は)とあるのをはじめ、「和漢三才

図会」介貝部香螺条に、「世俗隱^レ婦人陰戸^ヲ稱^ル貝^ト」^(は)と記され、

江戸時代のはやり歌に、「しぐれはまぐりみやげにさんせ、宮のお亀が情^ヲ所^レコリヤ、よろしくよし」、同じく川柳に、「蛤は初

手赤貝は夜中カなり」とあるなど、例の多いことである。此れらの例は、孰れも現在私たちが考察の対象として「神話」の時代からすれば、遙かに後世の表現ではあるが、此の方面に関する人の心は、何時の時代・如何なる場所にあつても同じことであつたと思われ、私たちが記紀の時代に其の類例を見ることが出来なものは、たまたま此の時期の教少ない文献に其のことが記されなかつたに過ぎないからだと考へられる。記紀の記事が、五穀の起源を語るに際し、「於^レ陰生^ニ麦、於^レ尻生^ニ大豆^ニ」(記)、「陰生^ニ麦及大小豆^ニ」(紀一書第十一)と、「陰^(女性生殖器)」や「尻」に同形形の穀物を引き当てていること、降魔力を有するとされた女性生殖器の外形と極めて良く似た殻をもつ安貝に、同様の呪的力能を認める民間習俗のあること、などからすれば、我國の未開・古代人の心に、貝と女性の其の部分とを結び付けるだけの想像力は充分にあつたと考へられるし、何にもまして、赤貝や蛤が、「討貝比売・蛤貝比売」と女人(女神)化されていることに、私たちは、其の推測を成立させるための強力な裏付けを見出すことが出来るのである。

未開・古代人が、女性の生殖器をもつて生命力の源泉と考へ、此れを邪氣悪靈祓除に有効なものであるとする一方において、赤貝或は蛤の如き貝類を、形体上の類似から女性の其の部分に引き

当てることをしていたとすれば、叙上の如き貝類が、降魔力を有する物、即ち傷病を治すための薬品として用いられたであろうということは、充分に考えられることである。そして其れらが、特に火傷の場合の治療剤とされたことの背後には、火之迦具土神の誕生譚に見るように、女陰と火とを関連あるものとする(記)思想が存在したものと思われる。

以上見てきたように、討貝比売・蛤貝比売の働きによって大穴牟遲神が蘇生したという「古事記」の載録する「神話」は、赤貝・蛤に女性生殖器を連想し、其れが降魔力を有すると考えた未開・古代人の思想、或は当該思想を根底に置きながら、未開・古代社会において実際に行われていた民間療法、を基に創作されたものであると考えられる。そして、此れが、特に大穴牟遲神の物語中に導入されたのは、此処で考察の対象に採り上げて一連の物語が、一貫して同神の生と死を主題とするものであると意識されたことも勿論与っていることであろうが、『日本書紀』に、「大己貴命、與少彦名命、戮力一心、經宮天下。復為顯見蒼生及畜産、則定其療病之方。……(中略)……是以、百姓至今、感蒙恩顧」(巻第一・宝劍出現(第八)段・一書第六)とあるように、大穴牟遲神(大己貴命)の性格に、医療神としての一面のあった事実が、直接には大きく影響した結果と思われる。大穴牟遲神の医療神的性格は、『伊予国風土記』逸文に、「大穴持命、見侮恥而、宿奈毗古那命、欲活而、大分速見湯、自下種持度來、以宿奈毗古奈命而漬浴者、暫間有活起」とあることによつても窺えるが、大穴牟遲神の蘇生神話創作者の脳中に、病を癒すことの出来

る者は、死より蘇える者でもあるといった考えが生じ、「討貝比売・蛤貝比売」と大穴牟遲神とが結び付けられたのであらう。

『古事記』の語るところによれば、討貝比売と蛤貝比売の働きにより蘇生した大穴牟遲神は、再び八十神に、大樹を用いて殺害され、此の度は、其の手段・方法は不明であるが、ともかくも「御祖命」によって蘇生させられる。八十神の飽く無き迫害を恐れた「御祖命」は、大穴牟遲神を「木国の大屋毘古神の御所」へと赴かせる。其処から更に、大穴牟遲神は、スサノヲ神の居る「根堅州国」へと移行する。

此処で問題とすべきは、何故「御祖命」が、八十神の魔手から逃すべく大穴牟遲神を、数多くある国の中で特に木国(紀伊国)へと向かわせたかということである。此れについては、諸家、「これは多分木にはさみ殺すといふ話から連想されたものに過ぎなからう」(19)、「大穴牟遲神が木攻めにあつたことから、木の神の助けを求めのために、紀伊国の大屋毘古のもとへ行くという話になつたのであらう」(20)、「ここになぜ突如「木国」が出てくるかといへば、それは「大樹を切り伏せ」其の木を打ち立て」「其の木を拆きて」等もつばら「木」というのがこの話の種になつてゐるからである」(21)と、此の箇所に樹木に関しての表現が見られるのに調子を合わせて木国(紀伊国)が持ち出されたと説明している。

確かに、『古事記』を読んでいると、其の全体的構成という大局的視点からの問題は一まず置くとして、イザナキ神の黄泉国訪問譚とか、スサノヲ神によるヲロチ退治譚等、それぞれに独立し

た一個の神話内部においては、各神話或は其れを構築する物語構成要素の原作者または伝誦者が、或る種の連想を働かせることによつて物語の展開を図つたと思しき箇所、少なからず存在することに気付くのである。例えば、今、其の上巻に限つて幾つかの例をあげてみると、イザナキ神の黄泉国訪問譚において、イザナミ神の身体が、「宇土多加礼許呂岐豆」という表現に雷鳴を連想して成をみたというのは、「許呂岐豆」という表現に雷鳴を連想しての結果であると考えられるし、天の安の河を間にしてのササノヲ・アマテラス両神によるウケヒで、「狹霧」中より女神、多紀理昆売命（奥津島比売命）・市寸島比売命（狭依昆売命）・多岐都比売命が出現するが、これは、キの音に関して甲類・乙類の別があるものの、狹霧——多紀理（奥津島）——市寸島（狭依）——多岐都と明らかに、霧より多紀理昆売の誕生をまず考え、以下の神名を音の類似によつて連ねているものと思われ、更にまた、イザナキ・イザナミ二神の産んだ神々の名を列挙する際に、鳥之石桶船神（天鳥船）・大宜都比売神・火之夜芸彦男神（火之炫昆古神・火之迦具土神）と、一見何の関連も持たぬかに思える船の神・食物の神・火の神を連続させているが、此の神名連続表記の背景には、既に指摘されているように、船の運搬する御饌・食物・農耕・野焼・火といった「もの」を通して発想しそのもの・とものを連想によつて繋ぐ思考⁽²⁾が働いていたと考えられるのである。

叙上の如き事柄を考慮し、未だ文字による記録がなされず、神話の保存・伝達が、伝誦者の記憶に頼ること極めて大であった時期のことを思うならば、私たちが現在考察の対象としている箇所

も、其の前後に、「切^ニ伏大樹^ニ」⁽¹⁾「如矢打^ニ立其木^ニ」⁽²⁾「拆^ニ其木^ニ」⁽³⁾「木俣漏逃^ニ」と、樹木に関わる表現が頻出するので、「御祖命」が大穴牟遲神の逃亡先きを木国（紀伊国）に求めたことに、神話創作者或は伝誦者の、樹木によつて物語の展開をなそうとする意図を読みとれることは、其の限りに於いて正鵠を得たものと言えよう。

しかし、大穴牟遲神の木国（紀伊国）への逃亡を、今一つ大きな観点、即ち、今回考察の対象として採り上げた物語の全体が、大穴牟遲神の生と死に関わっていること、同神が木国（紀伊国）から更に「根堅州国」へと移行していること、などを考慮に入れた視点から見れば、其処には、表面上の「木尽し」的物語表現とは別に、当該物語の創作者が有していた我国の未開・古代人的思想が導入されているのではないかと考えられるのである。其の思想とは、此の世に最初の人間が出現する際に、草木（植物）が大きな役割を果たしたとする考え、即ち、自分たち人間の生命と植物とは、極めて緊密な結び付きを有するとする考え、である。

我国の古文獻に載録された数々の「神話」中に、最初の人類の誕生譚は欠落しているが、其れが恐らく、植物より人間が自然発生したとするものか、超自然的存在（神）が植物を利用して其れを創作したという態のものであったと考えられることについては、此れまでも度々述べてきたので、此処に繰り返して述べることをしないが、其の神話に関連して、我国の未開・古代人の間には、必ずや植物を人間の生命の象徴と考えることがあっただろう。植物を生命（生）と考えるならば、樹木（植物）が多くあることによつて其の名を得た木国（紀伊国）は、正に生命（生）の

国であり、二度までも死を経験した大穴牟遲神の赴くべき場所として最適の地であったと言える。木国（紀伊国）は、度重なる大穴牟遲神の「死」と対置される「生」に直結する土地であるとして、「御祖命」により特に選ばれたのであり、「御祖命」に其のよ
うな判断をさせたのは、当該神話の創作者たる未開・古代人の、草木（植物）即生命とする思想であったと言える。そして、八十神の迫害の手が此の国にまで及んだ時、木国（紀伊国）に直結するかのように表現されている「根堅州国」が、大穴牟遲神の最後の避難所となつたことは、我國の未開・古代人により、「根」が草木（植物）の生命の源泉であり、従つて「根国」が生命力の横溢する土地であると考えられていただろうと思われることからすれば、至極当然なことであつたと言える。

記紀をはじめとする古文獻に頻出する「根国」は、「黄泉国」と同一視される場合があり、私たちが現在考察の対象としている大穴牟遲神の根国訪問譚においても、其の地に「黄泉比良坂」が存在するとなれば、イザナキ神の黄泉国訪問譚にも同じ「黄泉比良坂」が見られるので、根国即黄泉国と考えられがちである。しかし、種々の観点より推して、根国思想発生の原初段階にあつては、其処は、死の国・黄泉国とは全く逆の、生命の国・母なる国と考えられていたように思われるのである。既に述べたように、木国（紀伊国）が、最初の人間の誕生譚において重要な役割を果たす植物からの連想で、人間の生命と緊密な結び付きを有すると考えられた故に、人間を基に案出された超自然的存在態たる大穴牟遲神にとつて、八十神の迫害と死を逃れるに最適の場所であるはず

であつた。ところが、八十神の飽くなき追求の手は其の地にまでも及んだ。そこで彼に残された唯一の逃亡の場が、生の国たる木国（紀伊国）と直結する、生の源泉の国・根国であつた。

此処で少しく横道に逸れて、此の大穴牟遲神の根国訪問譚において、「根（堅州）国」に「黄泉比良坂」が存在し、恰も根国即黄泉国といった感を与えるので、黄泉国と根国との関係、此の兩國と其れに直結する地上世界・現実世界との関連、について述べるならば、我國の未開・古代人の間には、生と死の二つの現象をめぐつて、次のような世界観が存在していた時期があつたのではないかと考えられる。即ち、見てきたように、現実世界の木国（紀伊国）が、我國における最初の人間誕生譚との関わりで、生の国とされ、其処と直結する生命の源泉たる空想上の理想郷が、樹木と其の根の関係から、「根国」と考えられ、其の対極に想像上の死の世界「黄泉国」があり、其処は死者の赴くべき場所である故、死体を埋葬する墳墓からの連想で、地下の国・暗黒の世界と考えられた。そして、根国と直結する現実の世界が木国（紀伊国）であるように、黄泉国と現実世界との間にも接点があるはずであると考えられて、其の接点として選ばれたのが、『古事記』のイザナキ神による黄泉国訪問譚の末尾で、「其所謂黄泉比良坂者、今謂出雲国之伊賦夜坂也」と記されるように、出雲国であつた。黄泉国と出雲国との結び付きが何故生じたかについては、諸家、或は古代の出雲に一種の勢力が存在し、光明の神を祖神と仰ぐ中央政府に対抗したので、其処が暗黒の黄泉国と結合された、と言

から見て西にあたる出雲と地続きのあたりに黄泉国があると目されていた⁽²⁶⁾と論じ、更には、『出雲風土記』によると、出雲郡宇賀郷に「黄泉の坂・黄泉の穴」があり、しかも出雲国出身の土師連が葬儀を其の職掌としたことによる、と述べるのであるが、私は、まず木国（紀伊国）即ち現実世界と根国即ち想像上の理想郷という生の關係を代表する結び付きが既に存在したところで、其れに對立する死の世界たる黄泉国にも、現実世界との接点が当然あるべきだと考えられ、数ある国々の中で、木国（紀伊国）と多くの共通点（例えば、「熊野」という地名や名称を同じくする神社）を有する出雲国が、特に選ばれたのではないかと考える。生命力の横溢するはずの木国（紀伊国）と共通点を有するが故に、出雲国が死の世界・黄泉国と隣接するとされたというのは、矛盾した論理であるが、此の黄泉国と出雲国とが結合した背後には、今一つ、木国（紀伊国）に直結する根国が、其の名に有する「根」という表現から、地下にある国とされ、一部の人々の間で其の本義を忘れられて、黄泉国と同列視されていたという事情があったのではないかと考へる。言い換えれば、本来、生の国即根国・死の国即黄泉国の對立關係にあるはずのものが、根国・黄泉国共に地下の国として共通項を有すると考へられ、根国に直結する木国（紀伊国）と地名其の他に共通したのもをもつ出雲国が、黄泉国と隣接するとされるに至ったのではないだろうか。

『日本書紀』に、「伊奘冉尊、生火神一時、被灼而神退去矣。故葬於紀伊国熊野之有馬村焉」とあるのは、木国（紀伊国）の本義が忘れられ、其処が根国と隣接する所であり、根国は地下の国即

ち黄泉国と同じであるとされた結果、イザナミ神を其処に葬るとしたものであろう。

出雲国と黄泉国との結び付きは、叙上の如く、一方に木国（紀伊国）と根国との關係を置いて考へると難なく理解出来るのである。ただ、それでは何故、紀伊国と出雲国に地名其の他共通するものがあるかということになるが、今回は他に他に見るべき問題もあり、此処では、宣長が、紀伊・出雲兩國に同名の神社が存在することの理由を、其れらの祭神たちが、「出雲国より遷り渡り坐し時の由縁なるべし」と説明し、或はまた其の逆に、現代の論者が、「紀伊海人が瀬戸内海をまわり、出雲に移住し、熊野大神や素尊などの崇拜を移したのである」とする、一種の民族移動説によって一応の理解をしておきたいと思う。

* * *
最後に、残された紙幅を用いて、大穴牟遲神の根国訪問譚を締め括るの用に記されている記事の中より、其の登場神に関わる問題を選び、考察の俎上に載せてみたいと思う。

大穴牟遲神の根国訪問譚は、彼が八十神を追い払い、国作りをするので終息するが、『古事記』は、其の後に、稻羽（因幡）の八上比売が、大穴牟遲神の嫡妻須勢理毘売を畏れて、夫との間に生まれた子を、「木俣」に刺し抜んで祖国に戻り、其の子は木俣神と命名され、別名を御井神といった、という記事を追記している。此処で考察しようとするのは、木俣神の名に関わると思われる八上比売の行為が、如何なる考へに基づいたものであるか、ということと、其の別名が何故御井神とされたかということである。

八上比売が其の子を「木俣」に刺し挟んだことと、其の子が「木俣神」と命名されたということが、「木尻し」の形で其の物語展開を圖られている、八十神の大穴半遲神迫害譚、大穴半遲神の根國訪問譚と、どれほどの関連があるのか判然とはしないが、少なくとも、文脈上直結して語られる、八上比売の行為と、其の子が「木俣神」と命名されたこととの間に、因果関係の存在することは明白であると考えられる。

当該物語の作者が、「木俣神」の名を基に八上比売の行為を創作したのか、或は『古事記』の語る順序通り、八上比売の行為を語ることで、「木俣神」の名を考えついたものか、此れもまた判然とはしないが、八上比売の行為について語る際、其の物語創作者の脳裡に、八上比売の其の子を想う心情を描こうとする意識があったものと思われる。此の事は、八上比売が、其の子を「木俣」に刺し挟んだことの意味を考える時、明らかになる。此の行為について、太田善磨は、「木の股から生れたなどいふ民話と関係がある⁽³⁰⁾」と述べるが、私は、我國の未開・古代人が、最初の間誕生譚との関わりで、植物を自らの祖先が其れより誕生したとして、生命力の横溢する物と見ていたことが、此の行為に反映されているのではないかと考える。即ち、我國における未開・古代人の新生児に対する処遇及び其の命名法について考える時、私たちは、其処に彼らの長命祈願・病魔排除の思想を見出すことが多いが、其れと同様の考えに基づき、八上比売は、其の子を木の股に挟んだと思われるのである。最初の人間誕生に際し、植物が重要な役割りを果たしたと、恐らくは密接な関連を有すると考えられ

る、竹刀を用いての新生児の臍の緒切断の風習や、植物と人間の生命の始源との関わりで、植物の源泉と看做される「根」の語を用いて、人に「根子」の名を付けること、同じく人間の魂と密接な関係を有するとされた「鳥」に関連ある文字を、人の名の一部に用いること、糞尿の如きを幼児の名とすること、これらは孰れも人の生命の長久なることを祈願しての行為・事柄である。

八上比売も、此れら同様、置き去りにする子供の生命の長久なることを願い、生命力の象徴たる樹木の股（木俣）の「俣」には、恐らく生命誕生の場である人の「股」の意が掛けられているだろう）に、其の子を置き、樹木の有する生命力を其れに付与しようとしたのであろう。此のように考えてくると、此の部分の物語構成は、「木俣神」の名が先にあつて、子供を「木俣」に置くという行為が考えられたのではなく、其の表現順序通り、其の行為があつて、然る後、「木俣神」の名が考案されたものと思われる。

また、木俣神の別名が御井神とされることについては、此れまでに、「上代の井は泉であつたから、森と井とが密接な関係にあつたのであらう」、「泉のほとりに木が植えられ、そこにいわば井の神が祀られていた形を考えたい」といった意見が出されている。確かに、我國の古文獻には、「井上、有湯津香木」（記）、「鴨発飛、居於修布井樹」（播磨國風土記）賀毛郡条）といった記事が散見され、井戸の傍に樹木の繁茂する光景は、未開・古代人の眼に恐らくありふれたものと映つたに違いないので、叙上の如き解釈は当然成り立ち得るものであるし、また其れが蓋然率の高い解答でもあると私は考える。しかし、今一つ此処で私が考えてみ

なければならぬと思ふことは、「木俣神」の「木」と「井」との
関わりではなく、「木俣」と「井」との関係である。即ち、八上比
売の行爲について述べつつ既に触れたように、もし、当該神話の
発生原初段階から木俣神の別名が御井神とされていたとすれば、
此の「木俣」を、当該神話の創作者は、人間の生命の源泉「樹木
(植物)、其の股」人間の股、と考へ、生命誕生の場である女性の
「股」を湿地帯と見て、其処に水の湧出する「井」を連想したの
ではないだろうか。持つて回つた解釈であるが、八十神の大穴牟
遲神に対する迫害及び大穴牟遲神の根国訪問譚が、常に生と死に
関わる物語であつたことを思ふ時、此の部分にもやはり、其れが
尾を引いた形で関わっているのではないかと、私には思えてなら
ないのである。

もし、右のような考へが当該神話の原創作者の脳中にあり、其
のことが大穴牟遲神の根国訪問譚と、其れに続く八千矛神の沼河
比売求婚譚とを接合した者にも認識されていたとすれば、私たち
は、此の二つの物語が、単に、大穴牟遲神即八千矛神を主人公と
するということだけで、直ちに結び付いたのではなく、前者にお
ける御井神の「井」と、後者における沼河比売の「沼河」が、孰
れも其の背後に女性の湿地帯という連想を伴うという共通項によ
り、結合されたと思ふことが出来る。

「井」と「沼河」とは、なにも女性の其の部分を紹介させずとも、
直結するものであるが、八千矛神と沼河比売との間に交される歌
謡の表現内容より推して、沼河比売の名に其れが連想されること
からすれば、やはり物語接統者の脳裡には、上記のような考へが

働いたと思われる。

猶、木俣神と御井神との関係、即ち、「木俣」と「井」との関わ
りについては、古く、水脈を探り、井を掘るに、樹木の股状にな
つた部分を利用することがあつたことによるのかも考へている
が、現在のところ其の実例を見出し得ないでいる。

以上、八十神の大穴牟遲神迫害譚と大穴牟遲神の根国訪問譚を
考察の対象に選び、其処に見られる生と死の問題を通して、未開・
古代人の思想の如何なるものであるかを考へてみた。「古事記」が
載録する此の一連の物語には、更に考察すべき多くの問題が内包
されているが、紙幅の尽きた今、此処で一度擱筆とする。

注(1) 次田潤著『古事記新講』一五三頁。

(2) 高木敏雄著『比較神話学』二五〇頁。同じ説を述べるも
のに、別所梅之助著『聖書民俗考』三九頁がある。

(3) 土方辰三著「儀礼として見たる大國主と須勢理毘売の婚
姻神話」——『國語と国文学』第一一巻第一二号九三頁。
猶、井上光貞著『日本の歴史』神話から歴史へ』が、「服
役婚」の反映として(中公文庫版七六頁)。

(4) 中山太郎著『日本若者史』一二六頁。同様の見解をとる
ものに、肥後和男著『神話と歴史の間』一六三頁がある。

(5) 松村武雄著『日本神話の研究』第三卷三二八頁。当該物
語を成年式儀礼の反映と見るものとして、他に、三品彰英
著『日本神話論』一四頁、西郷信綱著『詩の発生』一〇二頁、
などがあり、其れを一種の通過儀礼の反映と捕えながら、
成年式儀礼とは別のものに其の出自を求めようとするもの
に、「巫呪入社式の慣習の反映」説(倉野憲司著『古事記全

註釈』第三卷二四四頁。同様の説は、松前健著『出雲神話』一五一頁にも見える。があり、上掲兩説の折衷とも見られるものに、「物語の背後には、呪師団体への入団式や成年式のような行事の存在した事が想定される」という意見(尾崎暢映著『古事記全講』一四二頁)、「巫医の入社式と若者の成年式とが二重写しのような恰好になっている」とする説(守屋俊彦著『記紀神話論考』二二九頁)などがある。

(6) 本居宜長著『古事記伝』十之巻。

(7) 貝原篤信著『大和本草』巻之十四。

(8) 源順著『倭名類聚鈔』巻十九。

(9) 次田潤著前掲書一四四頁。

(10) 日本古典文学大系1『古事記 祝詞』九五頁。猶、津田

左右吉著『日本古典の研究』上巻——『津田左右吉全集』

第一巻四六七頁、松村武雄著前掲書第三巻三二二頁、金子

武雄著『古事記神話の構成』一〇八頁、尾崎暢映著前掲書

一三九頁、肥後和男著前掲書一六四頁、等々が同じ意見を

述べているが、此れは、早く新井白石著『東雅』巻之十九

に見える。

(12) 宮武肅門著『門司より』——『郷土研究』第二巻第六号

四八一—四九頁。猶、藤に刺された時、傷口に女性の陰毛を

当てて即効ありといひ(宮武肅門著同上論——同上誌第

二巻第六号四八頁、松永美吉報告「山神とヲコゼ」——

『民間伝承』第二巻第二号四頁、大正二年一月二四日付柳田

国男宛南方熊楠書簡——飯倉照平編『柳田国男宛南方熊楠往

復書簡集』三二一—三二二頁、等)、火災を避けるに、女

性生殖器・腰巻・其の他女陰と直接関連ある物が有効であ

るとされる(小玉院村著「まじなひ(統)」——『民間伝承』

第三巻第一号二頁、富田準作者「火事と女の腰巻」——

同上誌第四巻第八号三頁、島袋盛敏著「首里のまじなひ」

——『旅と伝説』第五年第二号六七頁、連温卿著「火燒曆」

——同上誌第五年第四号七四頁、等)のなども、此れと同

源に出でた習俗・思想であると思われる。

(13) 紀貫之著『土佐日記』。

(14) 寺島良安著『和漢三才図会』巻第四十七。

(15) 十返舎一九著『道中膝栗毛』五編上。猶、同書には、「お

まへのはまぐりなら、なをうまかるふ、ト女のしりをち」(五

編上)の表現が見え、女性の其れと始を結びつけたものに、

「始へ伊勢路で鳴の不調法」(『群書三才』六ウ)、「始てあげ

るがむすめ氣にいらす」(『柳多留』五篇)等の句がある。

(16) 『俳風末摘花』初篇。赤貝と女陰を結びつけたものに、

「我がおれた赤貝嶋が方一り」(『俳雪乃笠』七オ)の句や、

「まんまと生た赤貝におちめて。さんさん取みだし」(『好

色旅日記』巻五)、「三百戒五百戒も約る所は赤貝に止ると

のお談義。半兵衛が叱らるゝも貝の業。そなたにおれが異

見するも貝の業」(近松門左衛門著『心中宵庚申』下之巻)、

「女はなんでも赤貝とならぬうちの事だ」(式亭三馬著『善悪

人心覗機関』二編之下)といった表現がある。

(17) 津田左右吉著前掲書——『津田左右吉全集』第一巻四六

八頁。

(18) 鳥越憲三郎著『出雲神話の成立』一八二頁。

(19) 西郷信綱著『古事記注釈』第二巻二九頁。

(20) 拙稿「黄泉国」——山路平四郎・窪田章一郎編『古代の

文学3 古事記』六五—六六頁。

(21) 拙稿「ウケヒ神話の構造」——『講座日本の神話4 高

天原神話』五一頁。

(22) 山路平四郎著『日本人の性情と古事記の発想』——『日

本文学研究資料叢書 日本神話』九頁。

(23) 拙稿「記紀載録神話に於ける生と死の起源説明神話」——

『国文学研究』第三八集参看。

(24) 拙稿「生の起源説明神話をめぐって」——『国文学研究』第五五集七一頁。

(25) 津田左右吉著前掲書——『津田左右吉全集』第一卷五八三—五八四頁。

(26) 西郷信綱著『古事記注釈』第一卷一九六頁。

(27) 鳥越憲三郎著前掲書二一六頁。

(28) 本居宜長著前掲書十之卷。

(29) 松前健著『日本の神々』八一頁。

(30) 神田秀夫・太田善曆校註『古事記』上卷二二三頁。

(31) 拙稿「生の起源説明神話をめぐって」——『国文学研究』

第五五集五・九頁。

(32) 拙稿「古代の心」——『国文学研究』第四九集五五—五七頁。

(33) 松井羅州著『它山石』初編卷之一、鈴木忠侯著『一挙博覽』、佐喜真與英著「琉球の豚祭の風習に就いて」——『民族と歴史』第八卷第五号四九頁。

(34) 次田潤著前掲書一五四頁。

(35) 肥後和男著前掲書一七一頁。

(36) 拙稿「神語・天語歌(神代記)」——山路平四郎・窪田章一郎編『古代の文学1 記紀歌謡』三五—三六頁。

新刊紹介

山路平四郎・窪田章一郎編

『古代の文学3 古事記』

本書は、先の『柿本人麻呂』、『記紀歌謡』につづく「古代の文学」シリーズ中の一冊である。先の二書同様、大別される総論、各論、関連エッセイ、解説・参考文献の四部からなる。諸篇の細かい内容を目次に従って列挙すると以下の様になる。

『古事記』の世界◆イザナキ・イザナミ神による国土の修理固成と聖婚、黄泉国、天の石屋戸、大蛇退治、国作りと国譲り、海

幸彦と山幸彦、神武天皇の東征、三輪山伝説、佐保毘古王の反逆、倭建命、女鳥王と速総別王◆大后石之日売命、生きていた神話◆『古事記』主要参考文献解題・目録

右の目次からも明らかのように、ほぼ古事記全巻の主要な説話が通観できるように配慮されている。更に本書の特色としては、各論中の諸篇の冒頭に古事記本文の該当部が付されており、教材として使用される際の便宜もはかられている。先に列挙した目次にみられるように、人口に広く膾炙した神話や伝説が、学界の現状をふまえ、様々な面から様々な方法にもとづいて論究されている。上巻に含まれる説話に関して

は、主として神話的研究で、その作品の構成や構造、モチーフや諸要素上の問題などが論じられ、中巻以降は、その作品の構成や伝承者、史実との関連、歌謡や芸能、祭式などに関連する問題などにも広く言及されており、様々な示唆的論点にとむ総合的なリーディングスとなっている。

なお、巻末に付された詳細な文献目録は、単行本(主として明治以降のもの)、主要雑誌論文(主として戦後のもの)別、且つジャンル別に分類されており、学生諸君のレポートや論文作成にも有益かつ便利である。

(昭52・5 早大出版部 一七〇〇円)